

## 五月の心

私たちの施設の五月祭に参加した辻典子さんが帰るため車に乗ったら、少女が遠慮がちに寄ってきて何か渡そうとする。両手のない典子さんにとまどい、とっさに口元へもっていく。典子さんも釣られて口を開けかかったが、肩とあごで器用に受け取ってくれた。

それはお守り札だった。山のような苦勞が待ち受ける典子さんの未来に対する少女の抑えがたい祈りであろう。見事に生きぬいている典子さんは、ただの娘さんのまま偉大な若者である。老いも幼きも、その偉大さに結びあう七百人の集いであったといえよう。

幸せといい、生きがいという。それは精一杯生きること以外にはない。教育も福祉もそれを援助することである。相手の立場にたつて援助することである。

任運荘は寝たきり老人の、騰々舎は最重度障がい者が生涯を過ごす施設である。その人たちの表現した作品会場でも、多くの目がひきつけられていた。桑野雅春君らの

詩集「五月の風に」の一節に。

— 星空の下 僕は言う。

「今日一日 精いっぱい生きたよ」と。夜空には 僕のすべてを知っているかのよう  
うに たくさんの星が輝いていた。—

彼は典子さんよりはるかに重い障害を生きてきた。彼は「僕の一日」で記している。  
「朝起きるとまず、仏間へ一日元気であるようお参りします。：夕方は外に出て寮母  
さんたちの帰っていくのを見送ります。：」と。見送る寂しげな彼の目は、寮母を生か  
す愛の目にもなっている。ここにも若者が織りなす素晴らしい場面があった。

二つの施設は苛酷な運命を生きる老若男女の小さな集団である。五月祭は全員総参  
加が目標。植物的生を生きるある若者は水を飲む写真姿が参加である。必死の生がそ  
こにもある。五十人の老人のうち三十人が句や歌を自筆で、六人が寮母の添え手で書  
き留めた。その中の一句。「みかんがり 津久見へくればいなかだな」

(一九八二年五月十五日)